AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

ذ

看護学生の職業的アイデンティティに影響する要因に関する文献検討

太田愛夏　小形莉子
（指導：山口希美）

緒言

看護学生は、日々の学習を通して、看護職として働く上で必要不可欠な知識や技術を学んでいる。一般的に職業的アイデンティティはその職に就いてから形成されるが、看護師の場合は養成学校受験時から始まり、入学以降は基礎分野、専門基礎分野、専門分野へと、段階的に学修していく中で、アイデンティティが確立する[1]。このような職業的アイデンティティを身につけることは、看護実践の基盤となり[2]、看護師が長期にわたりキャリアを形成していくために必要である[3]といわれている。先行研究では、看護学生を教育する上で職業的アイデンティティの形成をどう促すかという、教育者の視点で考察されていたが、看護学生自身が職業的アイデンティティをどう形成していくかについての報告は見当たらなかった。

そこで本研究では、看護学生の職業的アイデンティティに関する文献から、看護学生の職業的アイデンティティに影響する要因を明らかにし、看護学生自身が職業的アイデンティティを形成するために必要となる能力と姿勢について検討した。

用語の定義

職業的アイデンティティ：マイマイティら[4]の定義を参考に、「看護職選択への自信、自分なりの看護師観、看護師の専門性によって医療に貢献できるという自負、看護師として社会に貢献しようという意識を持つこと」とする。

方法

研究対象：2020年5月に医中誌Web版を使用し検索した。キーワードは『職業』『アイデンティティ』『看護学生』とし、原著論文で絞り込み、119件ヒットした。その中で本研究の目的に沿った文献10件を研究対象とした。

データ分析方法：それぞれの文献の研究された時期、対象、研究方法を明確にして結果と考察を要約した。そして、職業的アイデンティティを形成するために必要な要因について対象文献を熟読し、抽出された要因について分類を行った。その上で、それらを比較・対比しながら分析した。

倫理的配慮：本研究は先行研究に基づく研究であり、使用する文献は、著作権の範囲内での使用をした。論文に引用する場合は、出典を明示した上で引用方法に留意して行った。

結果

対象文献の概要は表1にまとめた。

看護学生の職業的アイデンティティに影響する要因は、実習による学びや達成感、自己効力感、職業モデルの有無、自尊感情、思いやり行動、学習環境、学習意欲であった。自己効力感は1年生が最も高く、2～3年生で低下し、4年生で再び上昇していた。

職業的アイデンティティも自己効力感と同様の学年による変化があり、入学当初は一般的な看護師像と自分を適合させ、現実とは異なる理想的なイメージに基づいた職業的アイデンティティを形成していた。2～3年生で低下する理由は、学年が上がるにつれて、机上での専門的学習が進むことに加え、これまでイメージしてきた理想の看護と現実の違いを知るためで、1～2年生の実習後では、理想や期待と現実とのギャップ、現実の厳しさを体験したことによってリアリティショックが生まれ、職業的アイデンティティが低下したと考えられていた。しかし、4年生で再び上昇するのは、実習を重ねたことによる援助の体験から、看護職に対する自信や成長、実習達成感が生まれ、職業的アイデンティティの確立につながったと考えられていた。

考察

看護学生の職業的アイデンティティに特に影響すると考えられる要因について考察する。

1. 実習

実習による学びや達成感が職業的アイデンティティに影響することから、実習への取り組む姿勢が重要であると考えられる。山下ら[5]は、看護学実習において、学生は実際のクライエントに看護を提供できる程度まで、確実に知識や技術を修得しておく必要があるにもかかわらず、実際には十分に修得できていないことにより生じる問題に直面すると述べている。そのため、実習での学びを効果的なものにするには、日ごろから、実践の場で知識や技術を発揮できるように、意欲的に学習に取り組むことが重要であると考える。

2. 自己効力感

生田ら[6]によると自己効力感は、職業的アイデンティティを構成する中核要素である。また、山崎ら[7]は、臨地実習において、課題を達成するという体験を重ねたことによって自己効力感が高まると述べていることから、日々の学習で自己効力感を高めていくことが必要であると考えられる。自己効力感は、バンデューラによって提唱された概念であり、成功体験、代理経験、言語的説得、生理的・感情的状態が源泉となるといわれている[8]。看護学生は、演習や実習での成功体験が特に自己効力感に関わると考えられる。成功体験を生むためには、自分で小さな目標を設定し、繰り返しその目標を達成することが必要であると考える。また、学年進行によって自己効力感は一時的に低下するが、実習で看護を実践することで実習達成感が生まれ成功体験へとつながるため自己効力感は上昇すると考えられる。

3. 職業モデル

職業モデルが有る学生は、職業モデルが無い学生に比べて職業的アイデンティティが高いことが示されている[6]。そのため、看護学生が職業的アイデンティティを高めるためには職業モデルとなる人を見つけることが必要である。生田ら[6]、モデルを得ることで、将来なりたい看護職観を確立し、看護師になるために必要な自己の成長から、医療現場に貢献する看護師という専門職への誇りを感じると述べている。このプロセスが、職業的アイデンティティを高めることにつながっていると考える。理学療法士養成課程の学生では、早期臨床体験の時間数増加

や学年進行により職業モデルと出会う確率が高くなることが示されている[9]ことから、看護学生も同様に、職業モデルに出会う場面としては実習が多くなると予想され、学年進行により実習の機会が増加し、職業モデルに出会う可能性が高まると考えられる。そのため、看護学生が職業モデルとなる人物を見つけるためには、実習で医療の現場で実際に働いている看護職者の姿を意識的に見て、自分がなりたい看護師像と照らし合わせることが必要だと考える。

結論

本研究から、看護学生の職業的アイデンティティは実習、自己効力感、職業モデルから影響を受けていることが明らかとなった。これらの要因を看護学生自身が意識して職業的アイデンティティを高めていくことが重要であると考える。

対象文献

1)遠藤恭子, 米澤弘恵, 石綿啓子, 他:基礎看護学実習 II が看護学生の思いやり行動と看護職アイデンティティに及ぼす影響, 獨協医科大学看護学部紀要, 4:19-31, 2011.
2)藤本裕二, 藤野裕子, 松浦江美, 他:看護大学生低学年の職業的アイデンティティの推移と特性的自己効力感及び職業モデルとの関連, 日本医学看護学教育学会誌, 25(19):38-43, 2016.
3)生田奈美可, 長川トミエ, 清水佑子, 他:看護大学生の職業的アイデンティティの形成に関する研究—入学間もない時期の構造と特徴—, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 6(1):11-19, 2013.
4)古宇田芙美, 大黒理惠, 佐藤初美, 他:早期体験実習が看護学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果, お茶の水看護学雑誌, 4(1):15-21, 2009.
5)小藪智子, 黒田裕子, 合田友美, 他:看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究(第二報)経年的変化から考える教育的支援, 川崎医療短期大学紀要, 27:25-29, 2007.
6)マイマイティ・パリダ, 紙屋克子, 本多陽子, 他:臨床実習直前指導が実習への姿勢と実習後の職業的アイデンティティに及ぼす影響, 茨城県立医療大学紀要, 11:55-64, 2006.
7)落合幸子, 紙屋克子, マイマイティ・パリダ, 他:エキスパート・モデルが看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響—自己効力感・評価懸念との関連からみた効果—, 茨城県立医療大学紀要, 11:71-78, 2006.
8)清水美恵, 古株ひろみ, 本田可奈子, 他:看護学生の志望動機と実習達成感、看護職の職業的アイデンティティとの関係, 人間看護学研究, 13:1-7, 2015.
9)高畑正子, 大川明子, 梅田徳男:看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響-学年間の比較-, 中京学院大学看護学部紀要, 5(1):27-39, 2015.
10)辻田大介, 入山茂美, 高橋美和:看護学生の実習達成感と職業的アイデンティティの関連, 看護教育, 52(1):42-46, 2011.

引用文献

1)藤本裕二, 藤野裕子, 松浦江美, 他:看護大学生低学年の職業的アイデンティティの推移と特性的自己効力感及び職業モデルとの関連, 日本医学看護学教育学会誌, 25(1):38-43, 2016.
2)合田友美:看護系大学生のアイデンティティと食生活管理における自己効力感との関係, 香川母性衛生学会誌, 12(1):31-37, 2012.
3)田中希穂, 豊島めぐみ, 井内伸栄, 他:看護師養成初期段階における学習動機づけと職業的アイデンティティおよび学校適応感の関連, 日本医学看護学教育学会誌, 28(2):9-16, 2019.
4)マイマイティ・パリダ, 紙屋克子, 本多陽子, 他:臨床実習直前指導が実習への姿勢と実習後の職業的アイデンティティに及ぼす影響, 茨城県立医療大学紀要, 11:55-64, 2006.
5)山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子:看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学修の支援に向けて—, 看護教育学研究, 27(1):51-65, 2018.
6)生田奈美可, 長川トミエ, 清水佑子, 他:看護大学生の職業的アイデンティティの形成に関する研究—入学間もない時期の構造と特徴—, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 6(1):11-19, 2013.
7)山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子:看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 26:25-34, 2001.
8)野川道子:看護実践に活かす中範囲理論, 第2版, 354-355, メヂカルフレンド社, 2016.
9)大橋ゆかり, 吉野貴子, 本多陽子, 他:臨床実習教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果, 理学療法学, 33(6):311-317, 2006.

表 1　対象文献の概要

年	タイトル	著者	研究対象	結果
2006	臨床実習直前指導が実習への姿勢と実習後の職業的アイデンティティに及ぼす	マイマイティ・パリダ他	短大 3 年生 82 名と大学 3 年生 41 名	実習からの体験的な学びは実習後の職業的アイデンティティに影響した
2006	エキスパートモデルが看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響　自己効力感・評価懸念との関連からみた効果	落合幸子他	看護専門学校 3 年生 67 名	看護学生にとって魅力的なモデルとなる授業者の存在が学生の職業的アイデンティティに影響するという示唆が得られた
2007	看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究(第二報)経年的変化から考える教育的支援	小藪智子他	短大に入学した学生のうち 3 年間継続して調査できた 133 名	職業的アイデンティティは 1 年次が最も高く、2 年次になると低下した
2009	早期体験実習が看護学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果	古宇田芙美他	早期体験実習を控えた 1 年生 59 名、2 年生 49 名	実習前後でみられた職業的アイデンティティの相違はリアリティショックの影響であると考えられた
2011	基礎看護学実習Ⅱが看護学生の思いやり行動と看護職アイデンティティに及ぼす影響	遠藤恭子他	大学 2 年生 96 名	実習前後ともに思いやり行動と職業的アイデンティティに正の相関がみられ、思いやり行動がとれる学生は職業的アイデンティティが高いことが示唆された
2011	看護学生の実習達成感と職業的アイデンティティの関連	辻田大介他	大学 3 年生 125 名、4 年生 118 名	実習達成感と職業的アイデンティティには関連があることが明らかとなった
2013	看護大学生の職業的アイデンティティの形成に関する研究　入学間もない時期の構造と特徴	生田奈美可他	大学 1 年生 94 名	自己効力感、自尊感情と職業的アイデンティティとの間には相互に強い関連がみられた
2015	看護大学生の特性的自己効力感が職業的アイデンティティに与える影響—学年間の比較—	高畑正子他	大学 1～4 年生 320 名	職業的アイデンティティは 1 年生が最も高く、次いで 4 年生が高く、2・3 年生は低かった
2015	看護学生の志望動機と実習達成感、看護職の職業的アイデンティティとの関係	清水美恵他	各論実習を全て終了した大学 4 年生 174 名	実習達成感と職業的アイデンティティは有意な正の関係が示され、実習達成感が高いと職業的アイデンティティが高かった
2016	看護大学生低学年の職業的アイデンティティの推移と特性的自己効力感および職業モデルとの関連	藤本裕二他	大学 1 年生 277 名、2 年生 211 名	職業的アイデンティティと特性的自己効力感には有意な正の相関がみられた